メソポタミア神話にみる死の受容と悲嘆
――エンキドゥとギルガメシュの場合――

渡 辺 和 子

はじめに

4千年ほど前に成立した世界最古の長編叙事詩であり、広い意味での神話でもある『ギルガメシュ叙事詩』（標準版）は、11の粘土板にアッカド語（楔形文字）で書かれている。[1] この物語の後半部では、主人公ギルガメシュが親友エンキドゥの死を目の当たりにして、深く悲しむと同時に、自分自身の死すべき定めにもおののき、永遠の命を求めて、太古の昔にそれを得たというウトナピシュティムを訪ねて行く。ウトナピシュティムはどのように洪水を逃れて永遠の命を得たのかをギルガメシュに語るが、結局ギルガメシュは永遠の命を得ることなく帰還する。『ギルガメシュ叙事詩』には教訓めいたことはほとんど語られていないこともあり、これまでにさまざまな解釈や論議がなされてきた。もちろんひとつの神話や物語の読み方は無数にあり、どれが正しいといえるものではない。また誰でも、あるいは時によって、違う読み方をするものである。筆者はすでに『ギルガメシュ叙事詩』のひとつの読み方を提案したが、[2] 本論においても『ギルガメシュ叙事詩』を広い意味での神話ととらえ、「死の受容」と「悲嘆」という側面から光を当ててみることにする。しかしここではあくまでも、「エンキドゥとギルガメシュの場合」を浮き彫りにすることを試みる。

Ⅰ　エンキドゥの場合

1　出会いと冒険

エンキドゥにとっての「死の受容」について探るまえに、ギルガメシュとの出会いと冒険を簡単にたどる。

暴君であったウルク王ギルガメシュのために、神々は彼に匹敵するような存在としてエンキドゥを創造する。彼は荒野で動物たちと暮らしていたが、ある時ひとりの狩人が、狩の邪魔をするエンキドゥに困ってギルガメシュに訴え出る。狩人はギルガメシュから「聖娼」シャムハトをエンキドゥのもとに連れて行くようにいわれ、狩人がそのようにすると、エンキドゥはシャムハトの性的魅力に捕らえられる。そしてシャムハトと交わったエンキドゥは「賢く」なり、シャムハトの勧めによって荒野を捨ててギルガメシュのいるウルクを目指す。互いに友人を求めていたギルガメシュとエンキドゥであったが、彼らは出会うなり、つかみあって格闘する。しかしすぐに互角の力を持つことを認めて固い絆で結ばれる。[3)]

互角の力を持つとはいえ、ギルガメシュは王であり、エンキドゥはその従者という関係になる。エンキドゥはギルガメシュの願望に従ってレバノン杉の森に出かけ、その森を守る恐ろしい精霊フンババをギルガメシュと協力して殺害する（写真１、２参照）。そして巨大なレバノン杉を伐採し

写真１　フンババを殺害するギルガメシュとエンキドゥ。テラコッタ。紀元前２千年紀前半。ベルリン近東博物館蔵。松本編 2000, p.132.

て本国に運ぶ。さらに、ギルガメシュは女神イシュタルから求愛されるが、これを拒んだためにイシュタルが怒り、イシュタルの父である天の神アヌに頼んで天から「天の牛」を送らせる。しかしこれもギルガメシュとエンキドゥは殺してしまう。フンババと「天の牛」の殺害という不遜な二人の行為に対して神々が制裁を加えることになり、エンキドゥに死が宣告される。[4)]

写真２　フンババの顔。テラコッタ。エシュヌンナ出土。紀元前２千年紀前半。ルーブル美術館蔵。松本編2000, p.132.

２　人生を振り返る

まもなく死ぬと定められたエンキドゥはまず人生を振り返り、自分の功績を誇る。エンキドゥはニップルのシャマシュ神殿の扉に向かって話しかけている。その扉は、エンキドゥがフンババ討伐後にレバノンの山で伐採し、筏に組んでユーフラテス川をニップルまで下らせた木材で造られているという(写真３参照)。しかしエンキドゥは自分の死後に、別の王がその扉を嫌うかも知れず、自分の功績が後世に残らないことを恐れ、怒りを表す。それを聞いたギルガメシュは涙を流し、大量の金でエンキドゥの像を造ることを約束する。[5)]

神々によって罪と判断されたことに対する罰としてエンキドゥに死が宣告されたわけであり、いわば死刑による死である。しかし罪とされた行為の首謀者はギルガメシュであり、援助者であったエンキドゥが罰としての死を引き受けるのは理不尽と感じられる。エンキドゥ自身も納得できずに、怒るが、怒りの矛先はギルガメシュには向けられていない。[6)] また「野人」であったエンキドゥが誇るのはフンババ討伐ではなく、ギルガメシュとの遠征の成果として、壮大な神殿扉をすえたことであるのも興味深

写真３　レバノン杉の木材を水路によって運搬する様子を示すレリーフ（部分）ここでは木材を筏に組むことなく、船に積んだり、結び付けたりしている。ギルガメシュの時代よりも 1500 年ほど後のアッシリアの都コルサバード（古代名ドゥル・シャルキン）から出土。高さ 2.9 メートル。紀元前 8 世紀。ルーブル美術館蔵。青柳編 1985, p.139。

い。そしてエンキドゥが嘆くのはその功績が後世に残らない可能性である。それに対してギルガメシュはエンキドゥの像を造って永遠に記念すること

を約束する。

3　呪いと祝福

エンキドゥは朝になると、昇った太陽神シャマシュ[7] の前で涙を流して訴え、それまでの人生の節目を回想し、荒野にいたときに出会った狩人と聖娼シャムハトを呪う。

「あの狩人は私を私の友（= ギルガメシュ）にふさわしいものにしなかった。その狩人はその友にふさわしいものとならないように。彼の獲物を無くし、彼の報酬が減るように。彼の取り分があなた（= シャマシュ）の前で差し引かれるように。」(VII 95 – 98) [8]

「さあ、シャムハトよ、私があなたの運命を定めよう。[9] 永遠に続く運命を。私はあなたを大いなる呪いで呪う。私の呪いはすばやくあなたを見舞う。あなたは、あなたの芳醇の家を建ててはならない。……泥があなたの美しい服を汚すように。……道が交差する地点があなたの座所であるように。荒れた家があなたの寝所であるように。城壁の陰があなたが立つ場所であるように。……なぜならあなたは、［清かった］私を［弱く］したから。私は清かったが、私が荒野にいたとき、［あなたは］私を［弱く］したから。」(VII 102 – 131；［　］内は本文欠損部分) [10]

これを聞いたシャマシュは天からエンキドゥに語りかける。ただしシャマシュは、エンキドゥがシャムハトを呪うことだけについて諭し、狩人のことには触れていない。

「エンキドゥよ、なぜあなたは聖娼シャムハトを呪い続けているのか。彼女は神にふさわしいパンをあなたに食べさせ、王にふさわしいビールを飲ませ、立派な衣服を着せ、善いギルガメシュをあなたの朋友としたではないか。あなたの最愛の兄弟なる友ギルガメシュは、今やあなたを立派な寝台に横たえるであろう。(中略)［彼 (= ギルガメシュ) は］ウルクの人々をあなたのために泣かせ、あなたのために嘆かせるであろう。［裕福な］人々をも悲しみで満たすであろう。［そして彼 (= ギルガメシュ)］は、あなたが逝った後、汚れもつれた頭髪を頂き、ライオンの毛皮を［まとっ］て荒［野を］さまようであろう。」(VII 134 – 147)[11)]

エンキドゥはこのシャマシュの言葉を聞いて怒りの心が鎮まり、今度はシャムハトを祝福する。エンキドゥも狩人にはふれていない。

「さあ、［シャムハトよ、私があなたの運命を定めよう。］あなたを呪った私の口は転じてあなたを祝福する。［代官］たちも領主たちもあなたを愛するように。(中略)　兵士はベルトを緩めることをためらわず、黒曜石、ラピスラズリ、金、豪華な（？）耳飾りをあなたに贈るように。」(VII 151 – 158)[12)]

4　エンキドゥの夢

シャムハトを祝福したすぐ後にエンキドゥは病が重くなって横たわる。そして夢を見て、その内容をギルガメシュに語る。そこには冥界の様子も含まれている。

「一人の男がいて、その顔は黒ずみ、(怪鳥) アンズーの顔と同じよう

であった。その手はライオン、その爪はワシであった。彼は私の束ねた髪をつかみ、私を圧倒した。私が彼を打つと、彼は跳び縄のように跳び退いた。彼が私を打ち、筏のように私を倒した。彼は強壮な野牛のように私を踏みつけた。……〈友よ、私を助けて！〉［……］しかしあなた（＝ギルガメシュ）は彼を恐れて［……彼は］私を［打ち］、私をハトに変えてしまった。［彼は］私の腕を鳥のように縛り、（冥界の女王）イルカラ（Irkalla）の住まいである暗黒の家に私を引いて行った。そこに入った者は出ることのない家に、再びたどることのない道を通って行った。そこに住まう者は光を奪われている家に。そこでは塵が彼らの飢えをしのぐもの、彼らのパンは粘土。彼らは鳥のように羽毛のついた服を着ている。彼らは光を見ることはなく、闇のなかで暮らしている。戸と［かんぬきには厚い塵がつもり］、（塵の）家には［死の静寂が注がれていた。］私が入った塵の家のなかで、多くの王冠が集まっているのを見た。そこには古から国を治めてきた王たちが王冠を頂いて座っていた。彼らはアヌとエンリルの祭壇に焼いた肉をささげ、パンをささげ、皮袋から冷たい水を注いでいたものたちであった。私が入った塵の家の中に……（中略）……冥界の女王エレシュキガルが［座っていた］。冥界の書記ベーレット・ツェーリが彼女の前にひざまずいて書板を持ち、それを読み上げていた。彼女は頭をあげて私を見た。［『誰が］この男をここへ連れてきたのか？』」（VII 168 – 208）[13)]

この箇所のあと、本文欠損のためエンキドゥの夢の続きはわからない。エンキドゥの死期が近づき、冥界へ行った夢を見たということであれば、今日「臨死体験」と呼ばれているものに近い。

5　エンキドゥの最期

エンキドゥが夢の内容を語り終わった後のギルガメシュとの会話がどのようなものであったかについても、本文の残存部分から、互いに別れの言葉を述べていることがわかる。エンキドゥはギルガメシュに言う。

> 「［あなたと共に］あらゆる困難に［耐えた私を］思い出してほしい、私の友よ、私があなたと歩み通したことを［あなたが忘れ］ないように。」（VII 251 – 252）[14)]

エンキドゥは「夢を見たその日に力が尽きて」（VII 253 – 254）寝付くことになる。病が日ごとに重くなるが、12 日後にエンキドゥはギルガメシュを死の床に呼んで最期の言葉を伝える。本文に破損が多く断片的であるが、共に戦った思い出が語られているようである（VII 263 – 267）。[15)] その後の会話とエンキドゥの死の場面を含んでいるはずの部分の本文は残っていない。

II　ギルガメシュの場合

1　慟哭と葬送

続く第 8 書板では残存部分のほとんどがエンキドゥの死を悼むギルガメシュの言葉で満たされている。それはギルガメシュがエンキドゥのために読む「弔辞」の趣がある。エンキドゥの生い立ちから語りはじめ、共に体験してきた杉の森への遠征、「天の牛」の殺害などを回顧しながら、同時にエンキドゥの人生にかかわったすべてのもの――ウルクの人々だけでなく、杉の森の道、山々、川、木々、野生動物など――によびかけてエン

キドゥのために泣くようにという。(VIII 7 – 40)[16] そしてギルガメシュ自身も大いに嘆く。

「私は、私の［友］エンキドゥのために泣く。泣き女（*lallarītu*）のように激しく泣く。（中略）私たちは共に力を合わせて［山に］登り、天の牛を捕まえて［殺し］、［杉の森に住む］フンババを撃った。今、あなたを捕らえたこの眠りは何なのだ。あなたは黒ずんで、［私の声を聞］いていない。」(VIII 44 – 56)[17]

この後、直接話法ではなく〈地の文〉で次のように語られる。

「しかし彼（= エンキドゥ）は［頭を］もたげない。彼（= ギルガメシュ）が彼（= エンキドゥ）の心臓に触れても、もはや心拍はない。彼は、花嫁のように友の［顔］を覆った。鷲のように彼の周りを回りながら。仔を奪われた牝ライオンのように、前に後ろに行きめぐる。彼はその巻いた髪を引き抜き、一塊の毛髪を落とした。美しい装身具を引きちぎって投げ捨てた。」(VIII 57 – 64)[18]

そして夜が明けるとギルガメシュは国中に呼びかけて、鍛冶師、［ラピスラズリ細工師？］、銅細工師、金細工師、彫金師らを集め、約束通りエンキドゥの立派な像を金やラピスラズリを用いて作らせる。そしてシャマシュがエンキドゥに予告していたように（前述）、ギルガメシュはエンキドゥの遺体のために立派な寝台や椅子を用意する。そしてウルクの人々を泣かせ深い悲しみで満たすと言う（VIII 65 – 89）。そして同じくシャマシュが予告したようにギルガメシュ自身もエンキドゥに次のように言う。

「私はあなたが逝った後、汚れもつれた頭髪を頂き、ライオンの毛皮をまとって荒野をさまようであろう。」(VIII 90 – 91)[19]

また夜が明けると、ギルガメシュは高価な副葬品をエンキドゥのために大量に用意し、また冥界の神々のためにも高価な供物を用意してシャマシュに示し、エンキドゥが冥界の神々に受け入れられることを祈願している。またその次の朝がきてもギルガメシュはさまざまな供物を用意する。[20] 第 8 書板の最後の部分は欠損しているが、ギルガメシュはエンキドゥの死を確認してから何日にもわたって嘆き、シャマシュに見守られながらエンキドゥの像を作らせ、高価な副葬品や神々への供物を周到に用意していることがわかる。

2　旅立ちとシドゥリとの出会い

第 9 書板は、「ギルガメシュは友エンキドゥのために激しく泣いて、荒野をさまよった」と始まり、ギルガメシュの言葉が続く。

「私も死ぬのだ、エンキドゥのようではないのか。悲しみが私の心に入ってきた。私は死を恐れ、荒野をさまよう。ウバラ・トゥトゥの息子ウトナピシュティムのもとに急いで行こう。」(IX 3 – 7)[21]

このようにしてギルガメシュが出立し、ウトナピシュティムに会い、また帰還する行程が「異界往還」の性格をもつことについてはすでに別稿で検討した。[22] その往路では、太陽神だけが入って行けるマーシュ山の門の通過を、門番の「サソリ人間」に許され、暗黒の世界を進んで行くと、光り輝く宝石の庭が現出する。[23] そして第 10 書板の冒頭から、海辺に住む「居酒屋の女将」(*sābītum*) とされる女神シドゥリとの場面になる。

シドゥリは、ライオンの毛皮をまとい、憔悴したギルガメシュの様子を見て恐れて門を閉ざす。[24] しかしギルガメシュはシドゥリに語りかけ、共に歩んだエンキドゥが死んでしまったために深く嘆いていることを切々と語る。そのなかには次のような言葉もある。

「私が深く愛し、すべての苦難を共に越えてきた私の友エンキドゥを人間の（死の）運命が捕らえてしまった。六日七晩、私は彼のために泣いた。彼の鼻から蛆虫が落ちるまで、私は彼を埋葬させなかった。……私の友のことは私には耐え難く、荒野をさまよってはるか遠くまで来た。……私が愛した友は粘土に返ってしまった。私も彼のように横たわって再び起き上がらないのであろうか。」（X 56 – 71）[25]

このようなギルガメシュの訴えを聞いてシドゥリが答えるが、ここで定本にしている『ギルガメシュ叙事詩』の標準版ではなく、さらに古い古バビロニア版（紀元前２千年紀前半のもの）ではシドゥリ（ここでは別名の「居酒屋の女将」）の次のような忠告が記されている。

「ギルガメシュよ、お前はどこへさまよい行くのか。お前が求める（永遠の）命をお前は見出せないであろう。神々が人間を創造したときに、人間には死を定め、（永遠の）命は自分たちの掌中に納めたのだ。ギルガメシュよ、お前の腹を満たしなさい。昼も夜も楽しみなさい。日ごとに喜びをもちなさい。昼も夜も踊って遊びなさい。お前の衣を清潔にしなさい。お前の頭を洗い、水を浴びなさい。お前の手をつかむ子どもを見守りなさい。妻がお前の腰で繰り返し喜びを得るように。これが［……］の生を生きる［死すべき人間の（？）定］めなのだ。」[26]

しかしギルガメシュの耳にこの忠告は届かない。ギルガメシュは「女将よ、あなたはなぜ［そのようなことを］言うのか。私の心は友のために病んでいるのだ」と答えて、先へ進む道を尋ねている。[27] この後の内容は再び標準版と重なる。

ウトナピシュティムのところへ行く道をたずねるギルガメシュに、シドゥリは、海を渡って行けるのはシャマシュだけであり、その先には「死の海」が行く手をさえぎっているという。ところが、本文中には明言されていないが、シドゥリはギルガメシュの決意が固いと見たのであろう、ウトナピシュティムの渡し守ウルシャナビのもとへ行くように教える。[28]

ウルシャナビもシドゥリと同じように、ギルガメシュがライオンの毛皮を纏い、憔悴している理由を尋ね、ギルガメシュはエンキドゥを失った嘆きを繰り返す。[29] ウルシャナビとともに舟で海を渡り、さらに「死の水」を越えて、ついにウトナピシュティムのもとに到達する。

3　ウトナピシュティムとの出会い

ウトナピシュティムもギルガメシュに憔悴の理由を尋ね、ギルガメシュもそれまでと同様の嘆きの言葉を繰り返し、さらに次のように言う。

> 「私は行って、人々が語る〈はるかなるウトナピシュティム〉に会いたいと思いました。私はすべての国々を通って旅して来ました。険しい山々を越え、すべての海を渡って来ました。私の顔がよい眠りを得ることはありませんでした。私は不眠のまま苦しんできました。私の肉体を痛みで満たしてきました。私は労苦によって何を得たでしょうか。飲み屋の女将のところに行き着く前に私の衣は破れてしまいました。私は熊、ハイエナ、ライオン、豹、チーター（？）、鹿、アイベッ

クス（野生ヤギ）、荒野の動物と獲物を殺して、肉を食べ、その毛皮を剥ぎました。悲しみの門のかんぬきが瀝青とアスファルト［で封鎖］されますように。」（X 250 – 263）[30)]

これに対してウトナピシュティムは人間の死のあり方について説く。どんなに人間が自分の生活設計をしようが、死は容赦なく訪れるものであることを長々と語っている。本文欠損部分もあるため、全貌はまだわかっていない。ここにその一部を抜粋する。

「ギルガメシュよ、なぜあなたは悲しみを追い続けるのか。（中略）不眠のまま苦しみ続けて何を得たというのか。あなたは絶えることのない苦しみに疲れきっている。あなたは自分の肉体を痛みで満たして、自分の人生の終わりを近寄せている。人の子孫は茂みの葦のように折られてしまう。立派な若い男でも美しい若い女でも、死はすべての人を連れ去るのである。死を見た者はいない。死の顔を見た者はいない。死の声を聞いた者はいない。それでも怒る死は人間を折るのだ。（中略）偉大な神々であるアヌンナキが集い、（創造の女神）マミートゥムが天命を創造し、彼らに天命を定めたのだった。彼らは死と生を定め、死の日を明かさなかった。」（X 267-322）[31)]

ここで第 10 書板が終わる。

4　喪明け

第 11 書板では、なぜウトナピシュティムがどのように太古の洪水を越え、永遠の命を得たかについて語る（写真 4 参照）。ここでは、それまでのメソポタミアの洪水神話が大幅に引用されて組み込まれているが、その

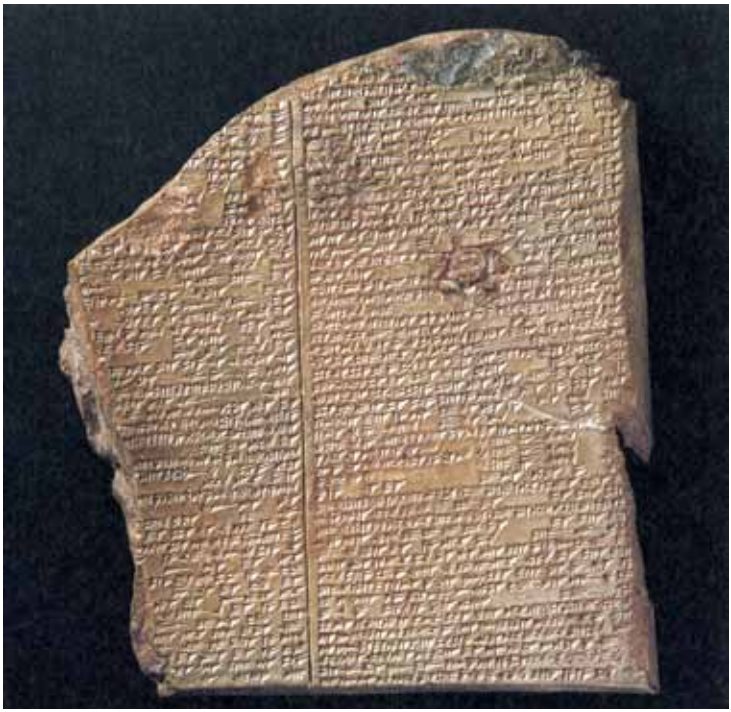

写真４　ウトナピシュティムが語る「洪水神話」が記された『ギルガメシュ叙事詩』第 11 書板の一部。紀元前 7 世紀に書き写されたもの。ニネヴェ出土。高さ 12.8 センチメートル。大英博物館蔵。松本編 2000, p.18.

意味についてはすでに検討した。[32] もちろん洪水神話が組み込まれたことにはそれなりの意味があり、その意味についての論議も尽きていない。しかし挿話である洪水神話の部分を抜いてみると、興味深いことにその前後の文脈がつながってくる。

洪水について語り終えたウトナピシュティムが、もはや神々が集って人間に永遠の命を与える時代ではないと言明した後で、ギルガメシュに六日七夜、眠らないでいるようにいう。しかし疲れきったギルガメシュはすぐに寝入ってしまい、七日目になって目覚める。ギルガメシュが永遠の命を

得られなかったのは、これまでしばしば主張されてきたように眠らないでいるという試練に耐えられなかったからではない。[33] 前述したようにウトナピシュティムは、すでに洪水について語る前から、人間にとって死は避けられないものであること、死の時期は予想できないものであることをギルガメシュに説いているのである。しかし眠ってしまったことに気づいたギルガメシュは、ようやく死が避けられないものであることを悟る。それは次のような言葉から読み取ることができる。

> 「ウトナピシュティムよ、私はどうしたらよいのでしょう。どこへ行ったらよいのでしょう。盗人（= 死）が私の肉体を捕らえています。私の寝室には死が住んでいるのです。私がどこを向こうと、そこには死があるのです。」（XI 243 – 246）[34]

ギルガメシュのこの言葉の後で、ウトナピシュティムはウルシャナビに命じて、ギルガメシュに沐浴させている。その汚れてもつれた髪を洗わせ、帰り支度として服を新調させる。[35]

この段階でついにギルガメシュにとっての喪が明けたといえる。メソポタミアにおいて喪に服するとは、身近な人の死を嘆いて、頭髪を乱し、汚れたままにし、立派な服を脱いで、あるいは引き裂いて、ぼろぼろの服をまとうことである。ここでは詳述しないが、いくつかの神話のなかでも、喪に服する者は、髪を梳らず、喪服を身に着け、一見して明らかにそれとわかる身なりをしていることが窺える。[36]

またここでもう一度検討したいのは、前述した古バビロニア版に含まれる「シドゥリの忠告」である。シドゥリは長らく喪に服しているギルガメシュに対して、特に「お前の衣を清潔にしなさい。お前の頭を洗いなさい、水を浴びなさい」という言葉が端的に示しているように「喪明け」を促し

ているのである。その前後の言葉もすべて日常生活へ戻ることへの勧めであり、決して「現世的享楽主義」の勧めでもなく、また退けるべき「誘惑」でもないのである。[37] ちなみに「シドゥリの忠告」と内容が酷似する『旧約聖書』「コヘレトの言葉」9章7－9節の解釈も再考を要する。

シドゥリに諭されても、その時点でギルガメシュは服喪をやめることはできなかった。しかしウトナピシュティムを尋ねて、永遠の命について聞き、そのあとでは自分の意図に反して寝入ってしまい、死が不可避であると確信する。

ギルガメシュは決して自分のためだけに永遠の命を求めていたのではない。自分の死よりも、まずエンキドゥの死を受け入れることができずに苦しみ、さまよっていたのである。ギルガメシュは深く悲しみながら旅を続け、シドゥリ、ウルシャナビ、そしてウトナピシュティムに自分の悲しみを語り続けた。これら「異界」の住人たちは異口同音にギルガメシュに生と死の定めを諭す。そのような過程を経て、ギルガメシュがエンキドゥの死を受け入れて悲嘆から脱したのは、自らの死すべき天命を受け入れることと同時であった。そのとき彼は初めて沐浴し、身を清めることができた。

服喪の状態も外見から明らかであるが、喪に服していない状態も、手入れされた頭髪と清潔な衣服から一目瞭然である。ギルガメシュは苦しい旅を通してエンキドゥの死を弔いぬくことができたといえる。

Ⅲ　考　察

「死の受容」や「悲嘆」については近年多くの論議がなされている。しかしそれらの事象自体は常に人類史とともにあった。文字によって残された最古のものに属するメソポタミアの文書であっても、長い人類史に比べれば古いものとはいえない。[38] そのことを踏まえた上で、本論でははじめ

に述べたように、エンキドゥとギルガメシュの場合に即して考えてみるのであり、一般論を導きだすことや、昨今の論議を当てはめることを目的としていない。また『ギルガメシュ叙事詩』の本文がA.ジョージの編纂によってより完全なものに近づいたとはいえ、まだ欠損部分は残っているのであり、また複数の読み方や解釈が可能である。そのためエンキドゥとギルガメシュの場合についてもさらに理解を深めてゆくことが可能であり、また必要である。しかしここでは重要と思われるいくつかの点を挙げておきたい。

1　相互関係

エンキドゥは死の宣告を受け、それまでの人生のなかで決定的であった出会いを呪うが、シャマシュの援助を受けながら克服し、出会いを祝福することができた。さらに手厚い葬送をギルガメシュに約束されて死を受容したとみることができる。そしてギルガメシュは友の死を深く、長く嘆き、ウトナピシュティムのもとへの旅をした結果、人間に定められた死を受け入れ、また悲嘆を克服することができたといえる。しかしエンキドゥの場合とギルガメシュの場合は密接に関連している。互いの人生のなかでの深い結びつきがあったことは、死という事象を越えても影響を及ぼしあってゆく。エンキドゥは、死後にも覚えられていることを望み、ギルガメシュはエンキドゥのための弔いを完成させると同時に自分の死をも恐れなくなっていた。死の受容も悲嘆も一人の人間の中だけで完結することはないということであろう。

2　非日常的援助

エンキドゥの場合は、受け入れがたい死を前にしてそれまでの人生で出会った狩人やシャムハトを呪うが、太陽神シャマシュの援助があって、そ

れらの出会いも肯定的にとらえることができた。また冥界に関する夢を見たことも、その意味は本文中でも明らかになってはいないが、エンキドゥによって何かの助けになったと思われる。

ギルガメシュにとっても、異界の存在であるシドゥリ、ウルシャナビ、ウトナピシュティムらと語りあいながら、非日常的体験を重ねていったことによって悲嘆を克服することができた。最終的には自分の力で、自分の中からの変化を感じ取り、それを素直に外に表現したことになるが、そこに至るまでの異界の住人からの援助が大きな意味をもったといえる。

3　服喪と喪明け

すでに古代においても死を悼み、嘆くことが儀礼化されていた。たとえば職業的な「泣き女」が存在していたことも「泣き女のように激しく泣く」(VIII 45) というギルガメシュの言葉から窺える。喪に服するということは前述したように、頭髪を梳ることなく、喪服を着ることによって、外見上も明らかに示され、またそれは死者に敬意を表することになる。前述したようにいくつかの神話のなかにも、服喪の様相を示すことによって相手を喜ばせることもあり、それを示さないことによって怒らせることもあることが記されている。[39] そのように服喪が外見によって判断されることから、当然のことながら古代においてもその形骸化はありえたと思われる。

しかしギルガメシュは、どんなに喪明けを勧められても自分の思いに正直に、喪の状態にあり続けていた。そしてある時点で沐浴を受け入れられる自分に気づき、喪から脱して清潔な身なりをした。ギルガメシュの場合はどこまでも心の状態と外見が一致していたといえる。その意味で『ギルガメシュ叙事詩』は完全な服喪と喪明けを生き抜いたギルガメシュを描き出しているとみることができる。その意味でもギルガメシュは、イニシエーションの成功者であった。[40]

注

1） 神話の定義をめぐる論議と『ギルガメシュ叙事詩』の概要については渡辺 2005a 参照。邦訳としては月本 1996 を参照。新たな本文断片をも盛り込んだ最新の編纂、英訳、注釈、解説については George 2003 参照。本稿では『ギルガメシュ叙事詩』の本文と行数の表記は George 2003 に基づき、本文の引用は原則として私訳を用いる。

2） 渡辺 2005a 参照。

3） George 2003, I, pp.540–565；月本 1996, pp.6–28（第 1 – 2 書板）参照。ギルガメシュとエンキドゥの「鏡像関係」については渡辺 2005b 参照。

4） George 2003, I, pp.566–631；月本 1996, pp.29–80（第 2 – 6 書板）参照。第 6 書板はエンキドゥが夢を見るというところで終わっている。その夢は神々が定めたエンキドゥの死の予兆であると思われるが、それに言及しているはずの第 7 書板の冒頭は破損している。

5） George 2003, I, pp.634–639；月本 1996, pp.82–85 参照。

6） ただし『ギルガメシュ叙事詩』のヒッタイト語版によれば、エンキドゥが見た夢の内容がギルガメシュに語られる場面で、「エンキドゥが死ななければならない」という神エンリルに対して「天の太陽神」（アッカド語のシャマシュに相当する）は、罪のないエンキドゥを死刑にする理不尽を指摘している。月本 1996, pp.257-258（中村光男訳）参照。

7） 太陽神シャマシュは、昼は地上のすべてのものを照らし、夜は地下の冥界を移動するとされ、生者の神であるとともに死者の神でもある。シャマシュは生と死に通暁しているが、神々の世界のなかでのシャマシュの地位はそれほど高くない。むしろ低位の神々や人々からの訴えや願いを最初に受け止めるような立場にある。渡辺 2003, pp.32–33 参照。

8） George 2003, I, pp.638–639；月本 1996, pp.85–86 参照。月本は、狩人が「わたしをわが友（＝ギルガメシュ）と同等には扱わなかった」（VII 95）と訳しているが（月本 1996, p.86）、原義は「～に見合うものにする、～に十分なものとする 」であり、ジョージは ‘who did not let me be a match for my friend’ (George 2003, I, p.639) と訳している。それに続く VII 96 の訳も異なる。

9） ここで「運命を定める」（*šiāmu*）と訳出した語は通常「天命を定める」と訳される語である。メソポタミアでは、天命を定めることは最高神の役割である。しかしここではエンキドゥが呪いと祝福として、すなわち何か良いこと、あるいは悪いことが起こるように願うという形の祈りの表現となっている。

10） George 2003, I, pp.638–641 参照。「清かった」（*ellu*）というのは、ここでは「無垢であり、悩みがなかった」という意味であろう。

11）George 2003, I, pp.640–643；月本 1996, pp.88–89 参照。
12）さらにこの祝福の言葉は次のように続く。「神々のなかで［最も有能な］女神イシュタルが、［家計が？］しっかりしていて、貯蔵甕が積み上げられている家を持つ男のところにあなたを送るように。［あなたのゆえに］正妻である 7 人の子どもの母親が見捨てられるように。」（VII 159 – 161）George 2003, I, pp.642 –643 参照。
13）George 2003, I, pp.642–645 参照。イルカラは冥界を表す語のひとつであるが、ここではエレシュキガルの異名。George 2003, II, p.849 参照。冥界についてのこの箇所に先立ってエンキドゥは自分の夢について次のように語り始めている。「私の友よ、夜の間に私がみた夢のすべてはこうだった。天は喜びの声をあげ、地は応える。私はその間に立っていた。」（VII 165 – 167）George 2003, I, pp.642–643 参照。
14）George 2003, I, pp.646–647 参照。
15）George 2003, I, pp.646–647 参照。
16）George 2003, I, pp.650–653；月本 1996, pp.96–98 参照。
17）George 2003, I, pp.654–655 参照。
18）George 2003, I, pp.654–657；月本 1996, pp.99–100 参照。
19）George 2003, I, pp.456–457；月本 1996, pp.100 – 101 参照。
20）George 2003, I, pp.656–665 参照。
21）George 2003, I, pp.666–667 参照。
22）渡辺 2006, pp.20–28 参照。
23）渡辺 2006, pp.23–24 参照。
24）シドゥリはギルガメシュの外見から「野牛の屠殺者」（*muna'ir rīmi*）だと思って恐れる。George 2003, I, pp.678–679 参照。
25）George 2003, I, pp.680–683 参照。これを含む嘆きの言葉は、後にウルシャナビに対しても、ウトナピシュティムに対しても繰り返される。George 2003, I, pp.686–687；pp.692–693 参照。ギルガメシュが死の直後から埋葬まで遺体を見守り続けたことは、殯（もがり）に類する風習があったことを暗示している。
26）George 2003, I, pp.278–279；月本 1996, pp.213–214；渡辺 2005a, p.122 注 19）参照。
27）George 2003 I, pp.278–279；月本 1996, p.214 参照。
28）George 2003, I, pp.682–683；月本 1996, p.120–121；渡辺 2006, p.23 参照。
29）George 2003, I, pp.684–687；月本 1996, pp.122–124 参照。
30）George 2003, I, pp.692–695；月本 1996, pp.130–131 参照。
31）George 2003, I, pp.694–699；月本 1996, pp.131–134 参照。
32）渡辺 2005a 参照。
33）渡辺 2005a, p.115 参照。後の注 40）も参照。
34）George 2003, I, pp.718–719；月本 1996, p.151 参照。眠りが死の隠喩であることについては月本 1996, p.337 参照。

35) George 2003, I, pp.718–721；月本 1996, pp.152–153 参照。
36)『イナンナの冥界下り』（シュメール語）では、冥界に下ったイナンナのために喪に服さず、立派な服を着ていたドゥムジはイナンナの怒りを買い、冥界へ送られた。渡辺 2006, p.11 参照。『アダパ』（アッカド語）では、天界に呼び出されるアダパに対して知恵の神エアが、髪を梳らず喪服をまとって行くようにという指示を与える。渡辺 2006, p.17 参照。『ギルガメシュ、エンキドゥ、冥界』（シュメール語）とその部分を訳した『ギルガメシュ叙事詩』第 12 書板（アッカド語）のなかでは、ギルガメシュが冥界に向かうエンキドゥに対して、洗濯した衣服をまとってはならない、香油を身に塗ってはならない、などの忠告を与える。渡辺 2006, p.29 参照。
37) たとえば月本は「シドゥリの忠告」をギルガメシュが退けた「現世的享楽主義の披瀝」と解釈し（月本 1996, pp.318-319; 337）、エリアーデは、ギルガメシュが克服した「誘惑」とみなす（エリアーデ 1991, p.87）。渡辺 2005a, p.123, 注 20）参照。
38) 渡辺 2005a, pp.105–106 参照。
39) 渡辺 2006 参照。
40) 筆者は、ギルガメシュをイニシエーションの成功者としてとらえ、ギルガメシュはイニシエーションに失敗したために永遠の命を得られなかったとするミルチア・エリアーデの解釈（エリアーデ 1991, p.88）にはすでに反論した。渡辺 2005a 参照。

参考文献

青柳正規編 1985：『ルーブル美術館 I 古代エジプト / オリエント』日本放送出版協会。
ミルチア・エリアーデ 1991:『世界宗教史』I（荒木美智雄・中村恭子・松村一男訳）筑摩書房。
月本昭男 1996：『ギルガメシュ叙事詩』岩波書店。
松本健編 2000：『四大文明　メソポタミア』日本放送出版協会。
渡辺和子 2003：「メソポタミアの太陽神とその図像」松村一男・渡辺和子編『太陽神の研究』下巻　リトン、pp.25–62.
渡辺和子 2005a：「『ギルガメシュ叙事詩』における永遠の命と知恵」東洋英和女学院大学・死生学研究所編『死生学年報 2005』リトン、pp.105–128.
渡辺和子 2005b：「メソポタミア神話にみる〈鏡像関係〉」『東洋英和女学院大学こころの相談室紀要』9、pp.5-9.
渡辺和子 2006：「メソポタミアの異界往還者たち」細田あや子・渡辺和子編『異界の交錯』上巻、リトン、pp.9–41.
George, A. R. 2003：*The Babylonian Gilgamesh Epic*, I–II, Oxford.

Acceptance of Death and Grief in *the Epic of Gilgamesh:*
The Cases of Enkidu and Gilgamesh

by Kazuko WATANABE

The Epic of Gilgamesh, the oldest mythological composition, was written about four thousands years ago. Of its various themes, this paper focuses on the acceptance of death and grief in the cases of Enkidu and Gilgamesh.

Gilgamesh, king of Uruk, and his friend Enkidu make an adventure to a cedar forest and slay Humbaba, the guardian of the forest. They also kill the "Bull of Heaven" which Anu, the god of heaven, had sent against them. For these acts of hubris, the gods sentence Enkidu to death. After he is placated by the sun god Shamash and consoled by Gilgamesh, he can accept his painful destiny. Gilgamesh, mourning bitterly for Enkidu and in fear of death, sets out on a long journey to Ut-napishtim who had obtained eternal life. He refuses all advice to break his mourning. Ut-napishtim tells him not to sleep for seven days. However, he falls asleep immediately afterwards. When he wakes up, he realizes that it is impossible to obtain eternal life. At last he finishes his mourning and bathes, dresses in clean garments, and returns to Uruk.

Gilgamesh does not fail an initiation, as is often argued. I believe the epic presents examples of accepting death and completing grief.